

平和の方へ一歩でも

Vol. II

戦争を経験したり、戦争について身近な人から聞いている世代の私たちは、今の日本が戦争の方に近づきつつあるんじゃないか、と最近、毎日のように感じています。国は、大切な情報を秘密指定して私たちの目からかくそうとしたり、他国に行って武器で戦えるように憲法を解釈しようとしています。

戦争について身近に感じる事ができない世代に、その辛さを身にしみて感じてきた人が語りかけなければという気持ちから、この冊子は生まれました。

聖書に「剣を打ち直して鋤とする、槍を打ち直して鎌とする」というみ言葉があります。日本国憲法の『戦争放棄』と同じ精神ではないでしょうか。

国は戦争への道を急いでいるので、私たちも平和の方へ一歩でも近づくべく急がねばなりません。原稿ができた順に、冊子にして出すことになり、第2集ができあがりました。お読みになって、ご自分もあの頃の体験を書いてみようと思われた方は、原稿（録音）をぜひお寄せください。

- | | | |
|-----|-----------------------|--------|
| 第1集 | 兄は戦争に殺された | 酒井 直子 |
| | あれが日本の最後の戦争でありますように | 土田 黎子 |
| 第2集 | 真っ赤な太陽が落ちてきて | 西富 房江 |
| | 横浜大空襲の体験談 | 金山 かずお |
| | 4才の記憶 | 相馬 裕子 |
| | 戦争について考える（中高生へのメッセージ） | 加藤 正名 |
| | 世界遺産にしたい日本の平和憲法 | 土田 黎子 |

「平和の方へ一歩でも」編集責任

穠田 信子 菊池 杏子 土田 黎子(連絡先090-1115-5804)

真っ赤な太陽が落ちてきて（広島原爆）

西富 房江

昭和20年8月6日月曜日、いつものように8時からの暁第二九四〇隊の朝礼が終わって二階の部屋にもどり、机の上に書類や筆箱を置いたとたん、ものすごい風が吹き抜けました。驚いて反射的に外を見た私の目に、窓いっぱいひろがった真っ赤な美しい巨大な円い物体が映りました。それは地平線に沈む夕陽の赤より、もっときれいな色でした。それは手の届く近くにあの太陽が落ちてきた、と一瞬思ったほどでした。

けれどその反面、なにかこれはとてつもなく恐ろしいことが起きたのだという思いが強くなり、外の防空壕へ避難しようと窓に背を向けた瞬間、火傷をしたと思ったほどの、経験したことのない強烈な熱さを感じました。熱い爆風で、書類も筆箱も天井の太い梁の上にとばされ、部屋の出入口にあった衝立が倒れていました。急いで階段をかけおり防空壕に無我夢中で入り、中にどれくらいいたかわかりませんが、出てきたときにはすべては終わってしまっていたのです。

私が窓の外に見たあの美しい太陽と見紛った物体は、世界ではじめてアメリカが使用した原子爆弾だったのです。

防空壕から出た私たちが目にした情景は、衣服は破れ、火傷のため皮膚が垂れ下がって異様な姿をした人々が、診療所へ助けを求めるようすでした。建物の中にいた者は別として、外を歩いていた人は、建物の陰にいた人を除いてすべて火傷で、衣服はもとより、熱線で焼けただれた皮膚がやぶけて、まるでワカメをぶらさげているようでした。

私が勤務していた暁第二九四〇部隊司令部内の管理部は、炊事と経理が仕事でした。20名ばかりの事務員と筆生（軍隊用語で事務見習いのような立場）はほとんど郊外に疎開して、部屋には中尉と少尉と旅費を担当する私だけでした。爆心地近くにあった西部第二部隊の生き残った負傷兵が、司令部につぎつぎと運ばれてきて、凱旋館という広い建物に寝かされましたが、入りきらない兵士たちは外の広場に寝かされていました。私たちは飲み物やお粥や冷凍みかんなどを兵士たちの口に運びました。

その日、市内は燃えつづけ、私たちは軍隊の命令で帰ることを許されず、司令部で不安の一夜を過ごしました。市内の状況は調査に出かけた兵隊さんの報告でわかったところもありました。全滅と聞いて泣きだす人もいましたが、私の家のほうは焼けていないと知り、内心安堵しました。

翌7日午前10時すぎ、防空頭巾を背に、筆生数名で各自の家を探しまわりました。きのうまで毎日通勤した街は、なに一つさえぎる物のない「一望千里」の世界でした。御幸橋を渡ったあたりから、私は黒焦げ一色の異様な足元を見るのが怖く、真っ正面を向いて歩いているのですが、否応無しにおびたらしい数の死体が目に入ってくるのを防ぐことはできませんでした。

電車も溶けたのでしょうか、確認できませんでした。爆心地に近づくにつれ、黒焦げの死体やアフロヘアーのように縮れた髪^の死体、そしてそれらの顔はみな腫れあがっていました。これは人体の水分が高い熱を受けたため、瞬間に膨張したものだと言います。目を覆いたくなるこれらの現状は、まさにこの世の「生き地獄」という言葉が適切だと思いました。

相生橋から川を見たとき、たくさんの人たちが浮かんでいました。熱さに思わず飛びこんだのか、熱風で吹き飛ばされたものか、いずれにしても惨いありさまでした。橋の上には、ふしぎなことに服もなく、火傷の痕も一つもなく、革の長靴だけを身につけた騎兵が、乗っていた馬の傍らに倒れていました。馬もやはり熱線^で体内の水分が膨張したためか、全身異様に腫れあがり、今にも張り裂けそうなようすでした。

橋を渡って土橋の方へ歩いて行く途中、防火用水桶の中に、珍しく和服姿の母親が赤ん坊を抱いて座っている姿を見てハッとしました。外傷はもちろん、火傷もなく、まるで生きていたようでした。建物のなかからのがれて、思わず飛びこんだのか、爆風で飛ばされたのか、なにもわかりませんが、その母子像がいつまでも胸に焼きついて離れません。そのときは心に余裕などなく、ずいぶん後になってから、あれは幼子イエス様を抱かれたマリア様だったのではないかと思えてなりません。

数多くのさまざまな人たちの死を見届けながら、宇品の暁第二九四〇部隊司令部の建物の中で感じたあの熱さを思い出し、この人たちはどんな熱い思いをなさったんだろうと胸が痛みました。土橋からわが家へ向かう途中、舟入町で多数の韓国人が太陽に照らされてものも言わず座っていました。あの人たちはその後どうなったのだろうと、折にふれては思い出し、心を痛めております。

舟入川口町のわが家も、どぶ川を隔てた東隣の小学校も、焼けることは免れたもののペシャンコに潰れておりました。わが家は二階の床が階下に落ちて、座敷は土砂に埋もれていました。玄関の硝子戸は粉々に碎け散り、鴨居にたくさん突きささっていました。台所の畳も、足の踏み場もない有様でした。前日お腹を壊した長男を市内の小児科で受診させるため、疎開先から出てきた姉は、風呂場で洗濯物をしていて、硝子の破片で顔に少し傷を負っていました。母も甥も無事でした。

ただ一人父だけは勤務先の中学校への出勤途中、土橋で乗り換えのため電車

のステップに足をかけた瞬間、被爆しました。そのときは満員の人影が幸いして、わずかに右耳の付け根のそばにそら豆大の火傷をただけでしたが、目に見えない放射能を全身に浴びました。土蔵の下敷きになった勤労奉仕の人々の助けを求める声を耳にしながらも、自分自身が助けてほしいくらいで、下敷きになった人たちを助けることができませんでした。そして苦しみながら、死ぬ思いで通常30分くらいの道程を6時間以上の時間をかけて、わが家に辿りついたと言います。その直後から高熱に苦しみ、家にあったアスピリンを飲んだそうですが、食欲もなく、体の節々が痛み、原爆投下から9日目の8月15日午前7時すぎ、苦しんで苦しんで、敗戦を知らずして、放射能のために68歳の生涯を閉じました。

話は7日に戻ります。

私は家族が無事で、父も外傷がないことに安堵し、再び宇品へ引き返し、毎日負傷兵にお粥や冷凍みかん等を食べさせてあげる介護を続けていました。その大勢の負傷兵の中に、奥さまと思われる方が付き添っていらっしゃいました。こんな混乱の中で、なんと幸せな方だろうと思わず目を向けたところ、その女性が私の名を呼ばれたのです。驚いてそばに駆けよると「主人です」と負傷兵を私に引きあわされたのです。よく見るとその方は、司令部勤務より以前、私が女学校を卒業して、徴用逃れのため尋常高等小学校で代用教員をしたときの学校の先生でした。応召されて大本営のある広島城で、お仕事中被曝され、建物の下敷きになられたのでした。鼻が木片か何かで割られたように、真ん中で上下に分かれていました。先生のお名を読んでみましたが、もとより意識はなく、ただしきりにうわ言を仰っていました。責任感の強い方でしたから、きっとお仕事の内容を伝えていらっしゃるのだろうと推察しました。

別の負傷兵の中に、幹部候補生で比較的元気な方がいらして、「母が京都にいて、京都はとてもいい処だから遊びに来てください、ご案内します」などとお話になりましたが、何日かして亡くなられました。亡くなった方々はつぎつぎとムシロをかけられて運ばれていき、宇品のほうの岸壁でまとめて兵隊さんが焼いていました。何十年も経て、あのとき幹部候補生の住所をお聞きして、お家の方へ最後の様子をお知らせして差し上げればよかったのに、と後悔したことでした。

程なく8月15日の敗戦を迎えましたが、私は管理部で10月1日の軍隊復員式まで勤めました。

父が私の分まで背負ってくれたお陰で、今日88歳まで元気に過ごさせていただいていると感謝しております。でも父は家族に見守られながら亡くなったことは、私が広島で目にした多くの異様な死に方に比べて、非常に幸せな最期だったと思わずにられません。

(2013年12月)

1945年5月29日横浜大空襲の体験談

(川崎市立久末小学校・老人とこどもの交流会にて)

金山 かずお

その日は雲ひとつないのどかな日和で、口笛でも吹きたいような気持ちを時節がらおさえ、家から5、6分の駅へ向かい、10分ほど乗ると電車は滑るように横浜駅に着きました。東横線に乗りかえようとホームに降りると、突然「空襲警報、防空壕へ退避!!」とスピーカーがけたたましく鳴り、人々はドドッと駅の外へ流れだし、山側に避難しました。途中で恐る恐る空を見あげると、豆つぶのような敵飛行機が2機、日本の戦闘機の届かない高いところを飛んでくるのが見えました。

15分ほどで空襲警報が終わったので、家に戻ろうか会社に行くか、一瞬迷いましたが、また電車に乗り、工業都市駅、今の小杉駅に着いたとき、また空襲警報になりました。勤め先の日本電気多摩川工場にひた走りに走って、社内の防空壕へ飛びこみました。8時半ころ、横浜方面をまっ黒な煙が雲のように覆い、暗くなりました。

しばらくすると、役所の書類や病院のカルテなどの紙が、焼けちぎれて飛んできました。

私の家も燃えている！ 一人で留守番をしている父はどうしているだろう？ 父を思うと体中がぶるぶる震えだしました。

10時すぎ、空襲警報が解除になると同時に、会社を飛びだし電車に飛び乗った。妙蓮寺駅からさきは歩かなければならない。ようやく市電の終点、六角橋が火のなかに見えた。道路の両側は火の海で、建物は焼けおちてブスブスと青い炎をあげている。とつぜん電柱のなかほどが燃え尽きて、時計の振り子のようにブーンと飛び、30メートルほど前を歩いていた人が跳ねあげられて、あっという間に燃え上がる火の海のなかには放りこまれた。ぼうぜんとして立ちすくんだ。助けることもできず、声も出なかった。つぎは我が身だ。そこを駆け抜けるように走った。

電車のレールの石畳を歩く。溶けたアスファルトに足が埋まり、手や顔が焼けそうに熱い。やっと広い通りに出ると人影はなく、レールの上に黒いものが点々と散らばっている。近づいてみると、両手両足を天に差しのぼすようなかたちで、まるで天に助けを乞うような形で炭になってしまった人間だった。男とも女とも分からない。

ああ、父はどうしただろう。父のことで胸をつまらせ、炭になった人間をまたぐように我が家の方へひた走りに走った。

あたり一面の焼け野原。どちらへ行けば家につけるのだろう。小高い山に登ってみた。港や元町まで見える焼け野原に、線をひいたように京浜急行の高架線だけが残っていたので、それで久保山方面だと検討をつけて山道を行くと、見覚えのある小学校の裏に出た。体育館だけが半分焼け残って、ここに逃げた何百人の人が海からの熱風で焼き殺されたらしく、重なりあって死んでいた。息ができないほどの、強い死体の焼け焦げた匂いのなかを駆けぬけた。

水を一杯もらおう、と思って農家の裏手に入ると、ちょうど崖下の家だったが、芋や大根などを蓄えるために庭に掘った土の穴のなかで、老人や若い親子が煙にいぶされたまっ黒な顔で死んでいる。自家用に水をためた防火桶のすき間には、小さな女の子を抱きかかえるようにかばって母親が死んでいた。

お父さん、無事でいてください。祈るような気持ちで家の方へ向かった。

やっとの思いでたどりついた我が家は跡形もなく、家の前に父がもちだしたらしい鍋や釜や米櫃が、形を残さないほどに焼けただれてころがっていた。家が焼けても食べられるように、と出したのだろう。

父がいないかとそばの防空壕に入ると、隣のお婆さんが担架の上に寝ていた。「お婆さん、お婆さん」と呼んでみたが返事はなく、ゆすぶっている手の冷たい感触で、死んでいるのが分かった。あたりは暗くなり、山の際が赤い火や青い火でもやもやと燃えて、ちょうど狐火か鬼火のように恐ろしかった。

その夜は、老婆の死骸といっしょに防空壕で父の帰りを待つことにした。騒がしい人声に壕から飛び出すと、スコップやバケツをもった人が恐ろしい顔つきで走っていく。私もなにも分からず走った。500メートルほど先の米屋の地下倉庫から誰かが米俵を引っぱりだしてきた。まるで野良犬が群がるように人々がとびつく。取られまいとしてスコップを振りまわす男が青い炎に浮かびあがって、鬼か夜叉のようで、恐ろしい地獄絵を見るようだ。

私も明日の食料に一握りの米でもと思ったが、戦争でマヒされていた私のなかにあさましい人間の心が恐ろしいという気持ちが急にわきおこって、老婆の死骸の待つ壕にもどった。

夜はしらじらと明けたが、父は帰らなかった。その日から壕を根城に、けが人や病人が収容されている学校、病院、役所をかけまわったが、ムダだった。

駆けずりまわっている途中に、山の広場のところで兵隊が死体をたかく積みあげ、石油をふりかけて焼こうとしていた。父を捜させてほしいと頼むと、「早く調べろ、今、火をつけるところだから」と許してくれた。無我夢中になってトタン板を一枚一枚はがすようにして、死んだ人の顔をのぞきこんで捜したが見つからなかった。

父が逃げた道筋と思われる南区役所前の大岡川には、川筋に折りかさなって積み上げたように、人が死んでいた。ひとりひとりを覗いてまわったが父はいない。

7日目の6月5日、父捜しに疲れはてた私は、横浜商業学校（今のY校）に収容された。そこで、頭も顔も手も足も包帯でぐるぐるに巻かれ、だれか分からないような姿になった父に会った。

「私に会うまでは」と気を張りつめ、支給されたおにぎりやたくあんをバリバリと食べていたという父は、急にガックリしてなにも受けつけなくなった。そして治療らしいことも受けられないまま、11日に息を引き取った。ぐるぐる巻きにされた足の指の先に、薬もつけずに撒かれた包帯が膿んでグズグズになったところにウジ虫が3つも4つも、憎らしいほどコロコロと太って膿を吸っていた。

治療もしてもらえず、「ああ、刺身で一杯やりたいなあ」と言いながら死んでいった。今はスーパーへ行っても刺身は売ってるし、酒屋へ行けばお酒も売ってるが、その当時は戦争で、お酒もなければお刺身などという贅沢なものは食べられない時代だった。どんなに平和を望んで死んでいったかと思う。



横浜市の人口と同じ数の爆弾が落とされ、たくさんの尊い命が失われました。8月6日には広島で、9日には長崎で、あのピカドンが何十万人もの命を奪いました。そして8月15日、日本は戦争に負けたのです。その日、会社では全員広場に集まり、ラジオで天皇の声を聞きながら無念の涙を流しました。

父を、弟を、そして多くの友を失った悔しさ、戦争を避けることも止めることもできなかった無力さに泣いた、終戦の日を忘れることはできません。

戦後70年間の平和が人類に繁栄と進歩をもたらし、私たちの生活を豊かにしました。しかし、「人間の命は地球より重い」という西洋の諺がありますが、このことが本当に私たちの心の中にしっかりと根づいているのでしょうか。たくさんの人々の悲しみと、おじいさんおばあさん、そしてお父さんお母さんたちの、血のにじむような努力で築きあげた「平和」という、なににも代えることのできない大事なものを、ぜひ私たちの手で守っていこうではありませんか。

私は、久末県営団地の丸山ことぶき会という老人クラブの、会長をやっている金山かずおと申します。

4才の記憶 戦争を知ってますか（横浜大空襲）

相馬 裕子

昭和20年5月29日、その朝、私は幼稚園に行く時間がきても、近所の本多つとむくんと遊んでいて、「今日は幼稚園に行きたくない」と母に訴えたそうです。こわい父がその日に限って、「休んでいいよ」と言って、学校に出かけていったそうです。

父は本牧（大鳥）国民学校の教員でした。母は24才、弟は1才、私は4才でした。少したって警戒警報が鳴って、私はおにぎりを持って、庭の防空壕に母、祖母、弟と入りました。

しばらくするとメガホンを持った父が「急いで学校に避難するように」と知らせてまわっていました。

——午前9時22分から10時30分までの1時間にわたって、横浜市はB29の大空襲を受け、中心部が焼き尽くされました。

東神奈川駅、平沼駅、港橋、本牧（大鳥）国民学校、吉野橋の5ヶ所を目標として、大型焼夷弾が投下されました。——

「大事な物を2つ持って…」学校に避難するように、と父に言われ、私はお人形を2つ祖母におぼわせてもらい、母に手を引かれて家を出ました。

祖母は「どうしてもこの家に残る」と、母がいくら説得しても一緒に来ませんでした。私たちは火の海の中、学校に急ぎました。「早く行きなさい！」消防団のおじさんがホースを持って立っていて、声をかけてくれました。

学校には大勢の人が避難していました。学校のあちこちからも火の手が上がっていました。私はお母さんとはぐれて泣いていた女の子に、お人形を一つ上げたのを覚えています。

警戒警報が解除されて、おばあちゃんを捜しに家の方に歩いていきました。アスファルトが燃えて熱く、黒焦げになった死体が道いっぱいでした。私はその上をピョンピョン飛んでいました。

さっき声をかけてくれた消防団のおじさんが、ホースを持ったまま黒こげで倒れているのを母が教えてくれました。

あちこちでブスブスと煙が出て、何ともいえないにおいがしていました。

防空頭巾をかぶったおばあちゃんが遠くから走ってきました。「おばあちゃんが生きていた」と、走り寄って喜んだのを覚えています。祖母は本牧の海岸のボートの横に逃げていたそうです。

私の家は燃えて崩れ落ち、庭の防空壕には爆弾が落ちて大きな穴があいていました。

幼稚園の裏山の防空壕に避難した幼稚園の先生とクラスの友だちは、煙にまかれて亡くなったことを、ずっと後で母から聞きました。もしその日、私も幼稚園に行っていたら、友だちと同じ運命に遭っていました。

家を失った私たちは、本牧国民学校や、山の大きな地下壕のなかで生活していましたが、少したつと、その焦土の各地にポツリポツリと焼けトタン屋根のバラック小屋が建ちはじめました。父も私たちの小屋を作りはじめました。大人たちは協力して、焼け野原からトタンを拾ってきて屋根にし、扉はやはり拾ってきた雨戸でつくり、雨風はしのげる小屋になりました。

小屋を建ててるあいだ、びしょびしょと濡れた防空壕のなかで、「ぜったいにこのおじさんから離れないで」と母に言いきかされた、あまりよく知らないおじさんと子ども数人で、小屋ができるのを待ちました。やがて父のつくった小屋に家族で移ることができました。

話は前後しますが、少し戦争中の話をしたいと思います。

金属類を供出させられた時代ですが、家庭で飼われていた犬たちもつぎつぎと連れていかれました。私の家にある日、白い犬が迷いこんできましたが、きっと連れていかれるのを察して逃げてきたのだと思います。犬たちは食糧不足の戦地に食肉として送られていたと聞きました。今でも白い犬を見ると思い出します。

———毒殺された動物たち

昭和 18 年夏、東京の上野動物園に「猛獣は一ヵ月以内に毒殺せよ」の処置命令が出され、ジョン、花子、トンキーのゾウたち 27 頭が処分されました。名古屋、東山動物園のゾウは、関係者の努力で守り抜かれたので、毒殺命令の出どころが今なお問題になっている。———

昭和 19 年 2 月頃から、田舎のある人は次々と疎開をはじめました。本牧国民学校の 3 年生から 6 年生までの縁故疎開のできない児童の学童疎開も、昭和 19 年 8 月から始まり、箱根湯本に疎開しました。本牧小学校に残った留守番組の

父は疎開児童のために食糧を集め、トラックに積みこんで、本牧と箱根を行ったり来たりしたそうです。

空襲で逃げまどい、食べるものも着るものもない生活、弟はずっとおんぶさられていて、気がつくとお腹一面にトビヒが広がり、薬もなく、母が大変な思いをしたそうです。大人も子どももやせて青白い顔でしたが、それでも一生懸命日々を送っていました。

———主食の米は一人一日分 2 合 5 勺、約 330 g、茶碗に 3 杯の配給で、それも遅配、欠配しがちでした。———

中学生や高校生は軍需工場に、大学生は戦場や特攻隊に召集されるようになり、日本の上空にアメリカの爆弾を積んだ飛行機が低空飛行で現れるようになってきました。

白いケープで弟をおぶっていた母は「夜目に目立つ。敵機に見つかったらどうする」と、えらく憲兵に叱られていました。

今も鮮明に記憶しているのは、昼間、弟をおぶった母と私は、突然頭上から低空飛行してきた戦闘機にねらわれたのです。

足元にパラパラッという感じで、弾が落ちてきました。「早く、あの小屋に入って！」 母が叫び、小屋に飛びこんで見上げると、飛行機のなかの人影が動くのを見たのです。

———機銃掃射

B29 爆撃機による爆弾、焼夷弾、空襲とともに、戦闘機による機銃掃射も各地の人々を恐怖におとしいれた。超低空で思いのまま飛行し、走る列車を狙い撃ちし、B29 空襲のかげに隠れてあまり知られていないが、100 人をこす死者を出すことも少なくなかった。———

父が顔をすすでまっ黒にして、食糧の入った大きなリュックサックを背負って帰ってくると、私たちはにこにこ顔になりました。そのころはスズメもカエルも、何でも食べられるものは食べましたが、それでも足りず、親戚のいる山形や新潟まで列車に乗って出かけ、買ったり分けてもらったりしたそうです。買い出しが見つかる、警察に食糧を全部没収されてしまうので、帰りは石炭の車両にかくれて持って帰ってきたそうです。

また父が作ったパン焼き機も、電気のムダ使いをしているとあって、警察に持っていかれました。

昭和 20 年 8 月 6 日広島に、8 月 9 日長崎に、原子爆弾が投下され、8 月 15 日、戦争は終わりました。学童疎開から帰ってきた近くの鈴木さん兄弟は、横浜大空襲で家族を失い、親戚に引きとられていきました。

敗戦で占領軍が入ってきました。横浜の本牧には港もあり、たくさんアメリカ兵が上陸してきて、私はそのときはじめて黒人を見ました。若い女性はみんな田舎のほうへ避難していきました。しかしアメリカ兵たちはみんなやさしかったのを覚えています。

———はじめて本土決戦となり、私たちは戦争の恐ろしさをいやというほど思い知らされました。国による戦争は終わりましたが、原爆被災者はもとより、空襲により火傷を負い、爆弾破片で傷つき、また親を失って孤児になった人たちにとって、戦争は永久に終わらないのです。———

34 才だった父と 24 才だった母が、必死に生きて、そして弟と私を守ってくれたことを思うと、今その光景が目に浮かび、無性に会いたいという気持ちでいっぱいになりました。

(参考文献 1985年 朝日新聞社刊 「横浜大空襲展」)

中高生へのメッセージ「戦争について考える」

加藤 正名

私の年代の人たちは夏になるとあの暑い日、1945年8月15日を思い出します。その日は日本が連合国に無条件降伏した日だからです。夏は過去の歴史と戦争について考え、平和の大切さを確認するときとなっています。私は終戦の時は小学校3年生でしたから、戦争中の記憶は断片的です。でも記憶の確かな部分について、ぜひ皆さんに話しておきたいと思います。

1944年の後半から日本の大都市の軍需工場への爆撃がひんばんになり、翌年になると日本中の大都市、中都市が焼け野原になりました。私は小学校(当時の国民学校)2年生で、三重県の四日市に住んでいました。空襲にそなえて、家の裏庭には家族が逃げ込める防空壕がありました。当時、家々の塀はみな黒く塗られていましたが、それは敵機による空襲にそなえて、すべてを暗闇にするためです。塀の肩の高さには白いペンキが帯状に塗られていました。それは暗闇の中、白い帯をたどって逃げるためのものでした。

夜、警戒警報のサイレンが鳴ると町中の電灯が消されます。各家庭でも電球を黒いラシャ紙のカバーで覆います。空襲警報が発令されると、いっさいの電灯は消されてまったくの闇になります。私たちも真っ暗の中、防空頭巾をかぶり防空壕に入ります。アメリカの爆撃機B29の編隊の轟音が聞こえ、私たちは息をひそめて時を過ごします。B29の目標は名古屋市の工場地帯で、私たちの町は通過しただけでした。名古屋市にはゼロ戦を製造している三菱重工をはじめ多くの軍需工場がありました。

空襲警報解除のサイレンが鳴ると、母はマッチでろうそくに灯をともし、台の上に置きます。ほっとした皆の顔があかりに照らされます。後年、聖書を知るようになり「あなたがたは世の光である。山の上にある町は隠れることができない。また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば家の中のものすべてを照らすのである」の言葉を読んだとき、この体験を思い出しました。

日本は天皇をいただく神国である。外国に征服されたことはない。鎌倉時代、中国の元が2度にわたって日本を征服しようとした「元寇」のときも天は嵐・神風をおこし日本を救った。日清戦争、日露戦争のときも大国と戦って勝った。だから日本が国難にあっても神風が吹き、日本は戦争に負けることはない、と私たちは教育されていました。私も、大きくなったら天皇陛下のために、国のために戦う兵隊さんになるつもりでいました。立派な「軍国少年」でした。

それが1945年8月15日の無条件降伏により、すべてが一変しました。私は四日市から、母の郷里である山梨県の小さな村に疎開していました。小学校は窓に

障子をはめてある小さな古い校舎で、年をとった校長先生と若い何人かの女の先生だけの学校でした。降伏により、修身や軍国主義的な教科は禁止されました。教科書の軍国主義的な部分を墨で塗って消しました。教科書の大半が黒くなる教科書もありました。今まで教えられていたことがまちが이었다というのです。私は自分で教科書に墨を塗ったという記憶はありませんが、鮮明な一つの記憶があります。

8月15日に戦争が終わり、秋も深くなってきたころ、アメリカの駐留軍が小学校の視察に来るとの連絡がありました。さあ大変です。ついこの間までは「鬼畜米英（鬼や獣のアメリカ・イギリス）」「兵隊さんありがとう」「ほしがりません、勝つまでは」などの戦争を鼓舞する言葉が、教室に、また修身や国語の教科書に溢れていました。そのアメリカ兵が占領軍としてこの学校に来るのです。教室の張り紙などはすぐにはがして燃やしましたが、修身の掛け軸などは簡単には捨てられません。校長先生や女の先生たちは大慌てで、掛け軸やその他つごうの悪いものを、教壇の下に隠しました。数人のアメリカ軍人がジープに乗ってきて、視察はほんの一時で終わりましたが、この時の、これまで威厳のあった校長先生や女の先生方の青ざめた顔と狼狽ぶりを、私は今も鮮明に覚えています。

この小学校時代の体験が基となって、青年時代の私は「権威とか正義というものは相対的なもので、絶対的な正義などない。このことをよく認識してこれから生きていかなければならない」と考えていましたが、大学生になって、キリスト教のすべての創造主である神に出会い、私はキリスト者となりました。

さて、日本はなぜ天皇の権威をいただき、絶対的な正義を信じて、戦争に突き進んでいったのか、ここで考えてみたいと思います。

18世紀の後半から19世紀にかけて、欧米の国々はすぐれた科学技術を背景に、軍事力、経済力をたくわえ、世界に進出して植民地を作り、たがいに覇を競っていました。イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、アメリカなどの大国はアフリカやアジアを植民地として支配し、アフリカやアジアは大変つらい時期を過ごしていました。

そのなかで19世紀の後半、350年続いた鎖国を解き、なんとか文明開化に成功し、アジアではじめて近代化に成功した日本は、欧米の制度と科学技術を取り入れて、さらなる近代化の道を歩みました。そして欧米とおなじ手法で国を栄えさせる方法をとりました。すなわち富国強兵です。産業を興し、軍隊を強くして、植民地を作り、国力を強める方法です。そして植民地の対象は、必然的に自分たちと同じアジアの国々ということになります。

日本は「早く欧米に追いつき、先進国の仲間入りをするのだ」「先進国すなわち一等国の仲間入りをするのだ」との目標を掲げました。一等国とか三等国というと今では不自然に聞こえるかもしれませんが、当時は本当にこのように言っていたのです。

明治27年に日本は朝鮮半島の支配権をめぐる中国と戦争をしました。長い間鎖国をしていた日本にとってはじめての対外戦争、しかも相手は欧米からも「眠れる獅子」と恐れられていたアジアの強国、清です。しかし日本は清に勝利し、台湾を手に入れました。日本人は、自分たちが優れた民族であると誇りをもちました。

そしてそれと対照的に、中国、朝鮮、台湾の人たちを見下すようになりました。

さらにその10年後、明治37年には大国ロシアと戦争をすることになります。そして当時の政治情勢にも助けられて、なんとか勝利しました。欧米列強に勝った、ということで日本中が歓喜しました。そしてこれ以後、日本は正真正銘一等国の仲間入りを果たすために軍備を増強していきます。日本人が自信をもつのに合わせて、アジアの他国にたいして優越感をもつようになっていきます。

その後、第1次世界大戦を経て、満州事変、日中戦争と中国侵略を進めた日本は、ついにアメリカ、イギリスとの全面戦争に突入します。太平洋戦争(第2次世界大戦)です。日本は、開戦当初は、真珠湾攻撃、シンガポール陥落と勝利しますが、次第に劣勢となり、アメリカに追い詰められてきます。

戦況が不利になってきたとき、最後の手段をとることになります。特別攻撃隊です。片道の燃料と爆弾を積んだ攻撃機がアメリカの艦隊めがけて自爆攻撃を実施しました。こうして最高の権威・天皇の名の下に多くの若者が命を落としました。彼らは天皇のために死んだのでしょうか。彼らの手記が残っています。読んでみると、天皇陛下万歳を言うの也有りますが、多くは家族のため、日本のため、子孫のため、自らは犠牲になると言い聞かせて出撃していきます。彼らの死にはどんな意味があったのでしょうか。彼らの死をどうとらえるか、これが今の靖国問題の根底にあります。

明治開国からほぼ150年経ちました。その前半、1945年の敗戦まで、日本に平和の時代はありませんでした。幕末の戦争、西南の役の内戦を経て、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦で青島出兵、シベリア出兵、満州事変、ノモンハン事件、日中戦争、太平洋戦争と、戦争の連鎖でした。夫の遺骨を抱え、子どもの手を引いた若妻を市民が目礼をして見送る、街中でこのような光景をよく見かけました。この奥さんや子どもたちはその後どのような人生を過ごしたのでしょうか。

さて、目を世界の歴史に転じてみると、多くの民族移動の記録にであります。民族移動は多くの場合、戦争をとまないとします。ゲルマン民族の大移動は、4世紀から5世紀にかけて西域で中国と対立していた匈奴の子孫が西に移動し、中央アジアや西アジアに暮らしていたゲルマンの諸民族が、ちょうど玉突きのようにさらに西に追われてヨーロッパに移住し、今日のヨーロッパの骨格ができあがったと言われています。

もっと古く、聖書にあるイスラエル民族のエジプトからカナンへの移動も、歴史的にはこのような民族移動の小さな一つなのでしょう。モーセがイスラエルの民を率いてエジプトを脱出し、故郷カナンをめざし、カナンの地を見届けて死んだあと、後継者ヨシヤがカナンの地に侵攻します。その地にはすでにカナン人が住んでいるのです。イスラエルの民がカナンに定住するためには、カナンの人々を殺すか追いつくしかないのです。

それぞれの民族は、自分の信じる神の命により、あるいは王の命令により、あるいは自分の意志により、家族を守るために、また民族の生存をかけて戦います。そして戦いに敗れて消え去った民族もたくさんあるのです。近代になると、戦争の原

因が、土地・領土を奪うことだけでなく、さまざまな経済的な利害もからみ、戦争の規模もますます拡大しています。今でも世界中でさまざまな争いがあり、たがいに自分の正義を主張しています。どうして神さまはこのような地球と生物を造ったのかと思います。このような争い・戦争の連鎖を断ち切り、人類が秩序と平和のなかでたがいに他者を尊重して幸福に暮らしていくためには、どうしたらいいのでしょうか。

私はこのように考えています。神さまはご自分が造られたこの世界がこのままではよくないと考えられたのだと思います。「戦争とか争い」の陰にかくれている「愛とか思いやり」が表にあらわれるようにしたいと。このままでは「愛・思いやり」は「戦争・争い」に負けてしまいます。でもいくら負けても、「愛・思いやり」を第一に考える人が少しでも増えていけば、「愛・思いやり」が「戦争・争い」の上位に位することができるはずだ。そう考えて、争いに力で抵抗せずに愛に生きる人を生まれさせたのです。それがイエス・キリストです。イエスは愛に生き、愛の王国すなわち神の国について宣べつたえました。そして十字架上で殺されました。でもイエスの生き方に共鳴する人たちは、その後つぎつぎと現れて、今日ではイエスを信じるキリスト教は世界で最も大きい宗教になりました。イエスが説いた神の国はこの世で少しずつ大きくなっているのです。今でも戦争や争いが後を絶ちません。でも、なんとか争いをやめて、平和の中でことを解決しようという人々が、少しずつですが確実に増えていることを歴史は示しています。

日本で戦争が終わってから、もう70年近くが経ちました。明治から数えて150年の約半分です。その間、日本は戦死者をひとりも出さずに、戦争なしで発展しました。戦争により国を発展させてきたそれまでの時代を考えると、この70年は私には奇跡のように思えます。

戦後の日本の発展を支えた柱に日本の「平和憲法」があります。教派を越えたキリスト者青年の会に集った世界の青年たちは、日本憲法の前文と第9条を知り、一様に感動するとのことでした。この憲法は、平和を希求する世界の青年の理想なのです。

理想を高く掲げて、それに基づいて現実的な可能な対応をすること、これが、個人にとっても、会社や組合、学校など社会の組織にとっても、国にとっても、もっとも大切なことなのです。現実には、世界の争いは無くなりません。国連軍の紛争地への派遣、そこでの武力行使、それぞれの国の自衛権、また、そのための軍隊・自衛隊など、さまざまな問題があります。でも、理想を高く掲げることがもっとも大切なことなのです。世界に先駆けて平和を掲げた平和憲法が、世界に広まることを願っています。

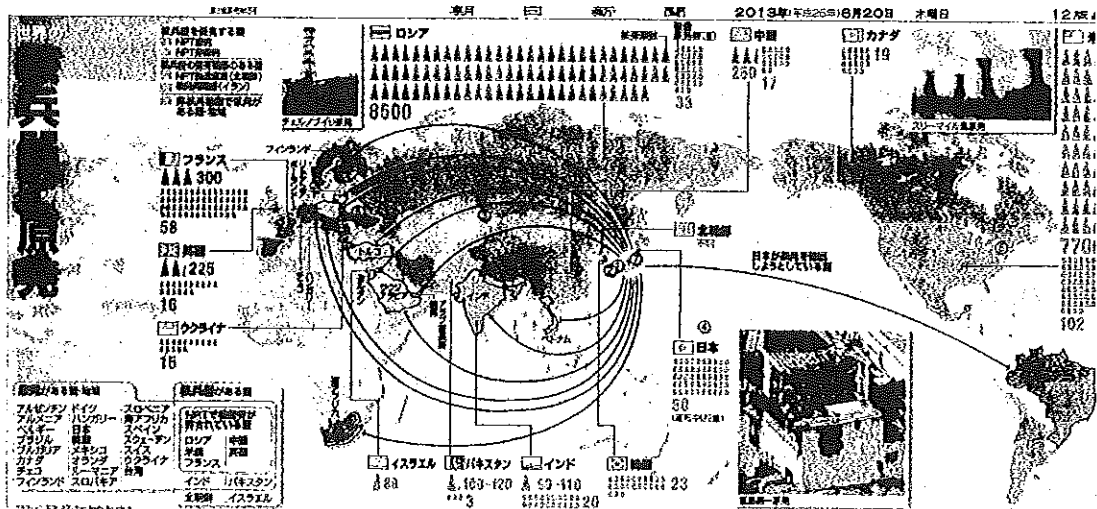
仙台のミッションスクール尚綱学院（幼、中、高、大学）学院長
加藤正名氏の中高生礼拝の5回の説教を一つにまとめたものです。

世界遺産にしたい日本の平和憲法

土田 黎子

230万人の兵士が死に、内地でも80万人が戦争の犠牲になり、そのうえ中国大陸、朝鮮半島、東南アジアでその何倍もの人々を殺した第二次世界大戦。そのことを反省して日本は「もう二度と武器をもって他の国と戦争をしない」という新しい憲法を、敗戦の翌年につくりました。そして68年間私たちは戦争をしない時間をつみかさねてきました。

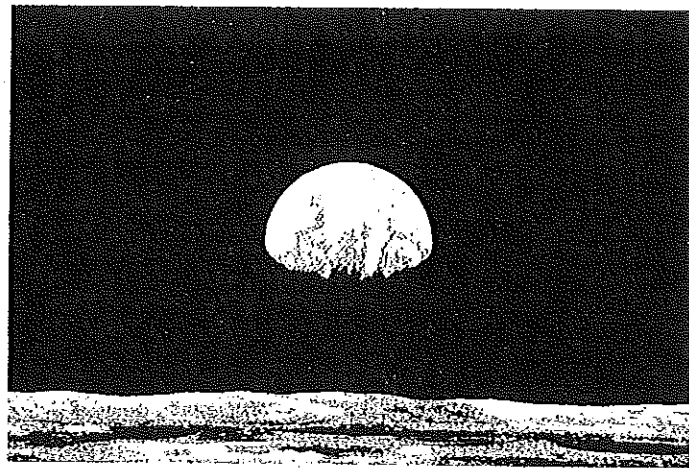
「他の国と戦争をしない」という憲法をもっているのは、中米コスタリカと日本の2国だけですが、このことは世界中の人々に自慢できることではないでしょうか。なぜかという、戦争というのは武器で他の国の人を殺す、つまり殺人行為です。平時にもし人を殺して逮捕され裁判にかけられたら、死刑か懲役何十年かの刑。殺人というのは命をもって償わなければならない重い罪です。それがひとたび戦争になれば許されたり、褒められたりする、というのはだれが考えてもおかしいことです。「二度と殺人はしません」と憲法の形で誓い、68年間一度も他の国の人を殺していない、国と国のもめごとがあっても言葉で解決してきた、ということは日本の誇りです。



さて、世界中に原子爆弾がいくつあるか、というこの世界地図を見てほしいのですが、広島に落とされたような原爆が17285発（2013年6月現在）

もあるというのです。地球が何回か破滅してしても、まだおつりがくる数だそう
です。冷戦時代に「相手国よりもっと大きい大砲を！」と競争してきた結果、
地球は危険きわまりない膨大な数の武器をかかえてしまいました。これでも、
軍縮の話合いの結果、やっところまで減らすことができた数です。

また原子力発電所にミサイルが当たったりテロ攻撃されたら、原爆が破裂し
たのと同じ悲劇がおこりますが（今、福島第一原発でミサイルならぬ津波に襲
われて大変なことになっていますが）、その原発が世界中に356か所ある…と
いう現在、もし大きな戦争でも起こったら地球はもうアウト。人類の住める場
所ではなくなってしまう。



若いときに読んだ立花隆の「宇宙からの帰還」という本に私はとても大きな
影響を受けたのですが、その巻頭に掲げられた月から見た「地球の出」の写真
です。真っ暗闇の宇宙空間の中でただひとつ、大気圏に守られて水と空気が存
在し、生物が生きていける星である地球。宇宙の中で今のところ地球以外に生
命体の見つかった星はありません。

真っ暗闇の宇宙空間は上下左右の感覚ももてず、時間の基準もない。空気も
水もなく、たとえば月の表面温度は太陽が当たっているときは130℃、当た
っていないときはマイナス140℃…生物が絶対に生存することができません。
そんな過酷な宇宙空間にあって唯一、太陽からの距離がほどほどで、大気圏に
守られて適度な温度に保たれ、重心を保つのに程よい大きさであるらしいこの
地球、詳しいことは私にはよく分からないのですが、なにしろ地球は「宇宙の
オアシス」と呼ぶにふさわしい不思議に満ちた所です。神が許したもうた「奇
跡の星」かもしれません。

宇宙から帰還した多くの飛行士たちにインタビューした立花隆によると、限
りない真っ暗闇の中で、薄いガラス玉のような大気圏に守られて、たった一つ

ぽっかり浮かんでいるこの青く輝く惑星を見て、みな一様に感動して「国境線はまったく見えない」こと、「このガラス玉の中で人がイデオロギーや宗教や領土のことでお互いに武器を持って争っているなんて、信じられないほどバカげている」ということを、月の表面に立ったとき痛切に感じた。一人や二人の飛行士ではなく、それは多くの飛行士が感じたことだったようです。

宇宙から地球を見るという視野を手に入れてしまった人類は、「私たちは日本人だ、アメリカ人だ、中国人だ」という枠から、「私たちは人類だ」というもう一つ大きい枠で、地球上のあらゆることを考えていく時代だということ、この本を読んで、強く感じました。この奇跡の星の上で、人同士が兵器を使ったり、原発を破壊したり、また環境を汚染したりして、人が住めなくなったとしたら、それは自滅ということなのです。

憲法のことを話すときに宇宙のことなどもちだすのは非現実的だ…と言われるかもしれませんが、地球上にこれほどの自滅の道具があるということのほうが非現実的だと思いませんか。日本の「武器をもって二度と戦うことはしません」という平和憲法は、宇宙から見てもきっとすばらしいものだし、人類が到達し得た最高の憲法として世界遺産に登録をお願いしたいくらいです。

ところがこのすばらしい憲法の顔に泥をぬるような、仲間の国が攻撃されたときに武器を海外に持ちだして、仲間の国とともに戦争することができる「集団的自衛権」というのが今、政府で論議されています。私は「68年間、他国の人を武器で傷つけたことがない」というこの国の誇りを失いたくありません。戦争だけは絶対にいやだ、と心から思っています。

隣の国同士、利害の対立する国同士で、もめごとがあるのは当たり前。もめごとは言葉をつくして解決しましょう。特に日本と中国、朝鮮半島は二千年も三千年も前から仲よくしたり争ったりをくりかえしながら、文化を共有してきました。米、文字、紙、印刷、織物、陶器、鉄、などの生活に必需の文化を伝えてくれた、尊敬すべき親類のような仲です。反日とか嫌中とか言っても、どこかに引っ越せるものでもなし、おたがい太人の知恵でうまくつきあってきた歴史に学びたいものです。

しかし近現代史の中で、日本が傷つけ、中国や朝鮮半島の人々は日本から受けた傷が癒えていないという状況があります。政治家がこの歴史を直視しないために隣国との関係がいつまでもギクシャクするのならば、私たち一般国民が直視しようではありませんか。学校教育が避けてきた日本の近現代の歴史。私たちがそれを学びましょう。隣国との間で、もしあらそいが起こったときに、自分たちの歴史をきちんと認識したうえで、真摯に話し合えるように。

(北海道ニセコ小学校6年生への話の原稿に加筆したものです)

世界各国に平和憲法を広めるために、日本国憲法、特に第9条、を保持している日本国民にノーベル平和賞を授与してください

"To spread a pacifist constitution in all the countries of the world, please award the Nobel Peace Prize to the Japanese citizens who have continued maintaining this pacifist constitution, Article 9 in particular, up until present.

ノルウェー・ノーベル委員会 御中

日本国憲法は前文からはじまり、特に第9条により、徹底した戦争の放棄を定めた国際平和主義の憲法です。特に、第9条は、戦後、日本国が戦争をできないように日本国政府に歯止めをかける大切な働きをしています。そして、この日本国憲法第9条の存在は、日本のみならず、世界平和実現の希望です。しかし、今、この日本国憲法が改憲の危機にさらされています。

世界各国に平和憲法を広めるために、どうか、この厚い平和主義の日本国憲法、特に第9条、を今まで保持している日本国民にノーベル平和賞を授与してください。

To:
The Norwegian Nobel Committee : Dear Mr.Thorbjorn Jagland (Chair of the Nobel Committee)

The Japanese Constitution is a pacifist constitution that stipulates renunciation of war in its preamble and notably Article 9. Article 9 in particular has been playing an important role since the end of WWII in preventing the Japanese government from waging war. Article 9 has become the hope of those who aspire for peace in Japan and the world. However, the Japanese Constitution is currently under the threat of being revised.

To spread a peace constitution in all the countries of the world, we request that the Nobel Peace Prize be given to the Japanese citizens who have continued maintaining this pacifist constitution, Article 9 in particular, up until present.

Name (名前)	Address (住所)

<p>呼びかけ団体：「憲法9条にノーベル平和賞を」実行委員会 共同代表：石垣、鷹巣、竹内、星野 送り先：神奈川県相模原市南区相模台 7-43-5(石垣義昭方) メール：nobelpeaceprize4article9@gmail.com ネット署名：http://chin.go/1bNX7Hbでもご賛同いただけます</p>	<p>取扱い団体</p>
--	--------------

- *送付先 上記の呼びかけ団体あてに、署名の原本を送ってください。(FAXは不可です。)
- *署名を送っていただく際には、総署名人数が分かるメモを付けてください。
- *いただいた署名は、ノルウェー・ノーベル委員会に提出する以外の目的では、使用いたしません。
- *署名は、日本語、又はローマ字でお願いします。
- *ノーベル平和賞を授与されるまで継続いたします。

